

**国際会議報告**  
**INTERNATIONAL**  
**MEETINGS**

# 国際会議報告

## 第71回 TRB 会議報告

古池弘隆\*

*Hirotaka KOIKE*

筆者は昨年と今年2年続けてTRBの年次大会に出席する機会を得た。昨年は論文発表者として、また今年はセッションの議長として出席した。この種の国際会議には多数の日本人研究者が出席するのが常であるが、TRBについては意外に日本からの出席者が少ない。おそらく毎年1月に開かれるため、特に日本の大学の研究者にとっては時期が悪いこと、また米国内の会議としての色彩が濃いことなどがその理由であろうが、あまりTRBについてご存知でない方もおられると思うので、以下にTRBの紹介も含めて年次大会の様子を報告する。

### 歴史と目的

TRB (Transportation Research Board) は米国の国家研究評議会 (National Research Council) の下部組織として、道路建設に関する調査研究を目的に、1920年にHRB (Highway Research Board) の名称で設立された非営利機関である。1974年になってより広く交通問題に関する研究を行うべく、現在の名称であるTRBに変更された。TRBがその研究対象とする分野は次の通りである。

- ・交通施設に関する計画、設計、建設、運営、安全および維持管理
- ・交通施設およびサービスに関する経済、経営および行政
- ・交通システムとそれを取りまく物理的、経済的および社会的環境との相互関係

TRBの業務は技術的な問題から交通政策にまで広範囲に及んでいる。今日ではTRBは、複雑で分散化した交通問題のさまざまな局面に対して影響を与えるような交通政策や、最新の技術的進展に関する情報や研究結果を集積した中心的な機関として重要な役割を果たしている。

### 構成と活動

TRBの組織は事務総長のもとに4つの部門から構成されている。それらは技術的活動、特別プロジェクト、

管理部門および協同研究プログラムの4部門である。

TRBの活動は、協同研究プログラムを除けば次のような割合で得られた資金によってまかなわれている。すなわち州政府の道路局および交通局から38%、連邦交通省および他の連邦政府機関から25%，そして私の援助、会員からの会費、出版物の販売などから残りの37%の活動資金を得ている。

TRBの技術的活動を行うためにさまざまな委員会やタスクフォースが組織されている。約200の常設委員会が5つのグループに分かれ、米国内で約3000人の委員が活動に参加している。これら5つのグループは、①交通システム計画及び経営管理、②交通施設の設計および建設、③交通施設の運用、安全および維持管理、④法律問題、それに⑤上記のグループ間の協力関係や課題に関するものからなっている。これらの委員会のいくつかは年次大会とは別に専門的な会議を開催しておりその数は年間20を越えている。それらの会議のテーマとしては、LRTやHOV、あるいは道路の安全性、航空需要予測、エキスパートシステムなど多岐にわたっている。

特別プロジェクトでは、1982年以来TRBの計画および政策検討小委員会が、米国の連邦交通政策策定に貢献している。最近では大型トラックへの規制、航空規制緩和にともなうサービスや安全製、マグレブなどの高速交通機関の役割、高齢者へのモビリティや安全の必要性など多くの研究がある。

もう一つの活動はTRIS (Transportation Research Information Services) と呼ばれる交通に関する情報検索サービスである。約32万件のデータがオンラインで検索できる。これらの情報は連邦交通省(DOT)や各州の交通局、さらに主要大学の交通図書館をはじめ広く国内外からも集められている。

TRBの活動のうちで最も重要なものの一つが出版活動である。後で述べる年次大会で発表された論文を中心にTRR (Transportation Research Record) と呼ばれる論文集が毎年約40冊ほど出版されている。またさまざまな特別会議や議会が求める政策研究の結果などを特別報告書として出版される。さらにTR News, Highway Research Abstracts, Urban Transportation

\*正社員 宇都宮大学教授 工学部建設学科  
(〒321 宇都宮市石井町 2753)

Abstracts, Highway Safety Literatureなどいくつかの定期刊行物も出されている。

協同研究プログラムの部門では現在2つの事業が進行中である。まず、NCHRP (National Cooperative Highway Research Program) は米国の州政府の道路および交通行政官協会 (AASHTO) と連邦道路局と協同研究で、道路の計画、設計、建設、運営および維持管理の面で遭遇するさまざまな問題を解決するために1962年に設立された。

もう一つのプログラムは連邦大量交通局 (UMTA) との協同で1980年から始められたもので、NCTRTP (National Cooperative Transit Research and Development Program) と呼ばれている。この対象となるのは短期的な公共交通問題の解決策である。

### 年次大会

TRBの年次大会は毎年1月にワシントンDCで5日間にわたって行われ、交通に関する会議としては世界最大規模のものの一つである。今年の会議では全部で250のセッションにおいて1000以上の論文が報告された。昨年から会場が3カ所に分かれ、グループ1 (交通システム計画及び行政) がワシントンヒルトンホテルで、グループ2 (交通施設の設計と建設) がオムニショアハムホテルで、そしてグループ3 (交通施設の運用、安全、および維持管理) がシェラトンワシントンホテルで行われている。それと同時に200以上にのぼるTRBの常設委員会も開催される。

参加者は、米国の連邦政府、州政府、地方自治体の交通行政官、大学の交通研究者、交通にかかわる企業関係者およびコンサルタントが中心であるが、さらに外国からの参加者を加えると全登録者数は5000人を越える。セッションは朝の8時半から夜の10時頃まで続き、熱心な討議が行われていた。日本からの論文発表数は比較的少なく10数編程度にとどまっている。

恒例の水曜日の昼食会では、TRBの活動報告、各種の表彰に続いて基調講演が行われる。昨年はボスキン大統領経済諮問委員長が米国の経済の見通しについて講演し、今年は環境保護省のローゼンバーグ首席補佐官が環境問題について講演した。それぞれ時宜にかなった講演内容であった。昨年はTRBの会期2日目の夜イラクへの空爆が始まり、一晩中衛星放送を見ていた人も多く、翌日のセッションではその話題で持ちきりであったことも思い出深い。

一般セッションは250もあり、しかも3つのホテルにまたがって行われていたため、シャトルバスで行き来しても出席できるセッション数は限られ、自分に関係のあるもの以外はあまり多くは聞けなかった。しかし、そう

いう人のために多くのセッションが録音され、そのテープを購入することが出来る。セッションのプログラムは270ページにもわたる大部のものであり、それに目を通すだけでも一苦労である。もっともこのプログラムは主題別あるいは著者別の索引が完備していて、検索の便を図っている。本年のプログラムから主題別でセッション数の多いテーマを拾ってみると、安全および人間工学に関するセッションが40と最も多く、次いで道路の運用および交通管制にかかわるものと計画に関するセッションがそれぞれ31ずつであった。また航空や環境に関するセッションも多く、最近注目を集めているIHVSなど先端技術についてのセッションも多かった。

筆者が参加したセッションはNMT (Non-Motorized Transport) に関するもので、自転車を中心に自動車に代わる交通機関として最近特に注目されはじめた分野である。1989年までは1つの分科会しかなかったが、昨年と今年は4つずつの分科会が設けられ、NMTのタスクフォースも設置され、筆者もメンバーに加わっている。発展途上国のみならず、欧米先進国においてもNMTへの関心が高まっていることが注目される。

TRBでは視聴覚補助具 (Visual Aids) に関する非常に厳格な規制があり、OHPやスライドなどセッションで使用するものについては、すべて事前に検査を受けることが要請されている。これは文字や図表が小さすぎて見にくくことを避けるためであり、例えばOHPの文字の許容最小寸法は小文字で5mm以上であることが必要である。筆者は準備していったOHPのグラフの縦横軸のタイトルがこの基準に引っかかり、どうしても使用を許可してもらえなかった。しかし、スライドやOHPの見やすさをここまで徹底するのは聴衆へのサービスとしては望ましいことであろう。わが国でも学会等での論文発表においては見習うべき価値があると感じた。

昨年は最終日にTRB事務総長トム・ディーンの司会のもとで、連邦政府の交通省の各局長 (連邦道路局、連邦鉄道局、都市交通局、国家道路交通安全局、研究及び特別プログラム局) と、産業界、労働界、大学からのパネリストによる「地上交通の新しい方向」と題するパネルディスカッションが催された。今年はそれに匹敵するような大きなセッションはなかったようだが、米国とPIARCやOECDのような国際機関との協調関係に関するパネルディスカッションのセッションが注目された。TRBの国際化の傾向の現れかも知れないという感想を持った。またエネルギーと環境に関するセッション数の急激な増加も、現在の地球規模での環境問題への関心の高まりを反映していると思われた。

(1992.6.7受付)